

ヘアードネーション

ライター：吉岡杏子、武田諒、横澤樹 エディター：横澤樹

新しい髪形は私たちをワクワクさせる。鏡の中に、ついさっきまでの自分とまったく違った自分があるからだ。一方、そんな私たちのちょっとした高揚よりもずっと強い喜びを感じながら鏡を見つめる人たちがいる。「自分の髪形が出来上がっていくのを見て、久しぶりに自分の本当の笑顔を見た。」一年半がんと闘って髪を失った15歳の高校生が残した言葉だ。

NPO 団体 Japan Hair Donation & Charity (JHDAC) は全国から髪の毛の寄付を募って、ウィッグを作り無償で提供している。対象は一般向けに販売されているウィッグではサイズが合わないことが多い、18歳に満たない子供たちだ。当団体は2008年、大阪市を拠点に3人の美容師によって設立された。「自分たちの技術を生かして、今までにないことができないだろうか。」設立時のメンバーの一人で、現在は事務局長を務める渡辺貴一さん(44)は当時の思いをこのように語る。「美容師をしながら社会貢献を。」アメリカで同じような活動をしている団体に倣ったのが始まりだったという。

ウィッグの完成までには多くの労力を要する。まず一つのウィッグを作るのに20~30人分の髪の毛が使われる。それぞれの長さをそろえた後、異なる色や髪質を整えるため中国の工場トリートメント処理という工程をたどる。頭のサイズを採寸し、処理後のきれいなツヤの出た髪の毛を国内の業者に送ってウィッグを製作。最後は渡辺さんらが希望者の要望に合ったスタイリングを施し、“onewig”という名の「世界に一つだけのあなたのためのウィッグ」が作られる。一連の過程で生じる費用は彼らの収入や寄付金で賄われている。希望者にウィッグが行き届くまでおよそ二年という歳月を要するためか現在希望者は10か月から1年の順番待ちになっている。

それでも“onewig”は髪の毛を必要とする人たちにとって、人毛のウィッグが高価なため経済面での援助となるのみならず、生活を送る上で大きな望みとなっている。群馬県内の大学に通う中島美佳さんは3年前、SNSを通じてこの活動を知った。中島さんは「いろんな人の協力があって出来上がったウィッグ。協力してくださった人から励まされている気がする。」と語る。“onewig”をつけ始めると、気軽に外出できるようになり、以前よりも明るくなったという。

ある無毛症の幼児に“onewig”を提供した際、本人以上にその両親が強く喜んでくれたという。「本人の周りの笑顔も導き出していることに気付いた時、やる価値があったなと感じた。」渡辺さんはそう振り返る。昨年提供したウィッグは20体ほど。目の前には資金・人手不足などの課題があるが、日本人のボランティアに対する意識の改革が大きな課題であると渡辺さんは語る。

「道で困っている人を手助けするように、ボランティアはもっと気軽な気持ちで行われるべき。」

ボランティアを特別視せず、「当たり前」のこととする姿勢が私たちに求められている。

編集後記

今回、ヘアードネーションという活動がどういうものか、を含めそこに関わる人々の思いを取材することができた。さらに、ボランティア活動に関わる人が感じている、「ボランティアは当たり前」という考え方がもっとこの国に根付くべきだと感じた。(横澤樹)

私が JHDA について書いていると知った友人の多くが予想以上に興味を示してくれた。寄付やボランティアへの意識が薄いと言われる日本の若者だがその興味を行動に移すきっかけさえあればその行為は変わっていくのではと感じた。(吉岡京子)

ボランティア活動には、助ける人の顔が見えないもの、見えるものがあります。どちらに劣り勝りありませんが、ヘアードネーションには、知らない誰かの生きる喜びに資することができる奥ゆかしい優しさがあると感じました。(武田諒)